

# じぶんの好きを大事にする！ じぶん、まる！

令和5年度の就学前人権・同和教育研修会では、にじいろi-RU(アイル)の田中一歩さんと近藤孝子(コンちゃん)さんをお招きし『性の多様性から「じぶん」について考える』と誰かが排除されない社会をめざして子どもたちとの出会いからみえてきたことと題してご講演いただきました。お二人は2015年ににじいろi-RUを立ち上げ、セクシユアルマイノリティとされている子どもたちと、すべての子どもたちに「じぶん、まる！」を届けるために活動しています。

ボクたちが出会っている小さな子どもたちは一生懸命「こうありたいじぶん」を出しています。それなのに「子どもはまだわからないから、生まれてきたときに割り当てられた性別で育

てたほうがいい」という大人たちもいます。自分を生きたいと一生懸命言っている小さな子どもたちの存在をいえないものにしてはいけません。小さいから：子どもだから：は理由になりません。小さな子どもでも自分を生きる権利があるのです。

ボクは人権を大切にすることで育った。ボクの両親は、兵庫県にある被差別部落で生まれた。両親は自分の育った地域が被差別部落と知らずに育ち、大人になつて部落差別というものが地域の人や地域に責任があるのでなく社会が作り出したものということを知る。自分たちの子どもにはその部落差別のおかしさ理不尽さを伝えながら育ててくれた。両親だけでなく、地域の人、教育保育に携わる大人た

ちが、部落差別の問題だけでなくいろいろな人権問題について考え、いろいろな人に出会わせてくれた。

そんな人権が大切にされる環境の中で育ったがボクにはある疑問があった。ボクが活動してきた解放運動や人権教育の中で、性のあり方や性の多様性についてなぜ知ることができなかったのか。なぜボクと同じような人に出会うことがなかったのか。いたけど「ここにいる」と言えなかった人がいた。「ここにいない」けど言えない環境があった。性に対しての偏見や差別があったから、その人たちはいない者とされ、ボクは出会うことができなかった。

出生時に割り当てられた性別がその人の性であり、そして誰もが異性を好きになる、それが当たり前だとする社会があった。

ボクは「女性の身体のかたち」で生まれてきたため女の子として育てられた。ボクの場合は自

分の意志と関係なく女の子という性別が割り当てられた。そんな中で、自分のことを男の子と思っている自分は、世界の中でたった一人の変な人間なんじゃないか、そして、女の子として存在している自分が女の子を好



きになる、そんな自分もおかしいと感じていた。こんなことを、周りの大人たちや大切な友達に知ったらボクのことを笑うかもしれない。だから誰にも知られず、誰にも言わずに生活していた。みんなと同じ女の子として存在し、男の子が好きな普通の女の子として生活していた。日常生活の中で、自分に嘘をつき、

周りの大人に合わせたり友達に合わせたりしながら、自分の思っていることと真逆の行動をしたり、言ったりして生活することがいつしか自分の当たり前になつていった。

そして小、中、高、2年間の大学に進んだ。ボクは子どもの人権を大事にする保育士にならなかった。20歳の時、女性の保育士として就職した。勤務した保育所は、子どもの人権はもちろん、保育士の人権も保護者の人権も大切に考える保育所だった。ただ、子どもの人権を大切にするとどうしてもどんな保育が子どもの人権を大切にすることにつながるのか、具体的なことは分かっていた。その保育所に転勤でやってきたのがコンちゃん(近藤孝子さん)だった。コンちゃん



は子どもたちに対して絶対に決め付けた見方はしない。子どもでも大人でもその人が何を思っているか、どうしたいか、どうしたいかを大事にし、やりたいと思うことを一緒にやろうとする。コンちゃんの保育を見て、「この人は絶対に相手を否定したり排除したりしない人」と確信した。24歳の時、コンちゃんに初めて自分のことを話した。ボクの話をするなずきながら聞いてくれたコンちゃんは「ひとりぼっちでしんどかったな」と言ってくれた。ボクはその言葉で初めて自分が「しんどかった」ことに気付いた。子どもの頃から自分のスイッチを切り替えることが当たり前になつていたのでしんどいと思えていなかったのだ。「ひとりぼっちでしんどかったな」という言葉に、ボクは涙が止まらなかった。

その日をきっかけに、コンちゃんの前では自分の大切にしたいことを大事にできる生活が始まった。何も嘘をつかなくていい、好きなものを好きでいら

れる、話したい言葉で話すことができる。24歳で初めて自分の大事にしたいことを大事に過ごす場所を獲得し、ボクは幸せを実感した。その後、いろいろな人に出会い、いろいろなことを学んだ。その中で「性は多様である」ことも知っていた。「性」について知りたい。「性」とは何かを調べる日々が始まった。「性が多様」であることを知って、ボクは「自分を生きたい」と思えるようになった。と同時に、性のことに限らず、自分の周りにはいろいろな人がいるということ、ボクはどれだけそのことを思いながら生活してきただろうか。守られるべき権利が守られていない人たちがいること、ボクもそんな社会を作っている一人であることを自覚し、「おかしい」と思うことに声をあげているだろうかと自分に問いかけた。自分の大事なことを大事にしたいと思っても、できない環境を作っているのが私たちだとし